



長い片思いの結末

ひとめぼ
一目惚れだったと思う。

それは ^{さかの} 遡ること数年前

小学4年生 高学年に上がったときの事

転校してきた一人の少年に一目惚れした。

^{きんちょう} 緊張するでもなく ^{たんたん} 淡々と自己紹介する彼にクラスの女子いや
俺を含めた男子までもが顔を赤らめ黄色い声を上げた。

それほどまでにその転校生は美少年だった。

転校生…いや ^{あまみや} 雨宮 ^り 莉乃はすぐに皆と打ち解けていった。

皆、我先にと本能のまま彼に話かけて仲良くなろうとする。

もちろん俺こと ^{ささら} 笹良 ^{みつる} 満も例外ではない。

自分も仲良くなろうと ^{ふんとう} 奮闘していた。

なにせ初恋だったからだ。

幸いなことに彼の家は近所でよく家に遊びに行った。

そして幸運なことにもう一つ

俺の味方をしてくれた要因がある。

母親同士が同じ学校の同級生で友人だった事だ。

初めてお互いの母親同士が面会した ^{とたん}途端 に会話に花を咲かせ
子供そっちのけで話し合っていた。

そうして俺たちは親公認で仲の良い友だちになった。

お互いの家を行き来したり近所で日が暮れるまで遊んだりと
家族ぐるみで旅行に出かけたりと仲良く遊んでいた。

そして莉乃と仲良しになったことで

^{ゆうえつかん}優越感 ^{ひた}に浸ったのを覚えている。

だがそれも長くは続かない。

幼い頃はそれで良かっただろうが思 ^{し しゅん き}春 期に入り性欲 ^{せいよく}という
ものが芽生 ^{め ば}えただ遊ぶだけでは物足 ^{もの た}りなくなってしまった。

彼と付き合いたい 抱き合ったりキスしたりそれ以上のことが
したいそう思うようになってしまった。

そうなるともう大変だ、彼を見るたびにドキドキして

どうしようもない気持ちに ^{おそ}襲われる。

幼き日の綺麗な思い出が嘘のように

下^{した}心^{ころ}なしでは彼を見れなくなってしまった。

成長すればするほど綺麗になっていく彼にときめきが
隠せなくなってきた頃に段々と近くにいられなくなった。

その最初のきっかけが中学 2 年の頃だ。

友人の一人が俗^{ぞく}に言うエロ本を歳の離れた兄から拝借^{はいしゃく}し学校
にこっそり持ち込んだ。そして放課後の教室、俺と友人数名
がバレないようにそのエロ本を取囲^{とりかこ}み興奮^{こうふん}しながら読んでい
た。内容は思い出せないが色んな意味で凄くドキドキしたの
を覚えている。

周りがお～とかやべ～とかエロいなどと
馬鹿みたいに盛り上がっていると
突然、教室の扉がガラッと開いた。

当然、皆びっくりして慌てて本を隠し後ろを振り返った。

そして一同^{いちどう}みな安堵^{あん ど}した。

扉を開けたのは莉乃だったからだ。

皆^{みんな} 口々に何だお前かよびっくりさせんなよ～等^{など}と言いながら
ら莉乃^{りの}をその輪へと自然に混ぜてしまった。

内心、俺は焦^{あせ}りまくった

こんなの莉乃^{りの}に読ませるなよ！！

早く目を塞^{ふさ}がないとなどと

その頃の俺は莉乃を女の子のように思っていた。

けれどやっぱり好奇心^{こうきしん}が勝^{まさ}ったのか

どんな反応をするのか気になって止めはしなかった。

疑問符^{ぎもんふ}を浮かべてこちらにくる莉乃に

皆ニヤニヤと悪い笑みを浮かべて本を見せた。

莉乃は予想^{はん}に反して反応^{にぶ}が鈍く小さくため息をした。

『…はぁ…先生来るとか言ってたけど…いいの？』

皆、期待してた反応とは違い目に見えて落胆^{らくたん}し

そして莉乃の発した言葉^{おおあわ}で大慌てになった。

早く隠せ隠せ！帰るぞなどと言いながら

急いで帰宅^{きたく}の準備^{じゅんび}をした。

ちなみに俺はそれどころではなかった。

理由は莉乃^{りの}の顔がこちらを向いて俺に来てこう言ったからだ

『あれ興味^{きょうみ}あるの？』

そんな事、言われてバカ正直^{しょうじき}にハイそうですとは
答えられなくその場は濁^{にご}して家に帰った。

そして、反省^{はんせい}しながらもどうにもあのエロ本と
莉乃の事が頭から離^{はな}れなかった。

そしてつい妄想^{もうそう}してしまいその日 初めて莉乃^ぬで抜いた。

エロ本でもアナルを使っていたなら男でもイけるだろうと
頭の中で莉乃を犯した。

そして気づいた頃には酷^{ひど}い罪悪感^{ざいあくかん}だけが残った。

そしてその晩 夢をみた

莉乃^{りの}に告白して盛大^{せいだい}に振^ふられる夢^{ゆめ}。

夢の中の莉乃は冷たく気持ち悪いと吐^はき捨^すて

二度^{にど}と顔を見せないでと言われそこで目が覚めた。

ショックで飛び起きた俺は全身に冷や汗を流し
動悸がしばらく止まらなかった。

そして気がついてしまった。

もしこの感情を知られてたら…嫌われるかも…とそばに居られなくなるのかと思うだけで胸が締め付けられる。

そんな事になるぐらいならと

……徐々に彼と会う頻度を減らした。

別に完全に縁を切ったわけじゃなくて我慢できる程の距離を保っていた。

ずっと一緒にいたらこっちの身が持たない、いつ思いをぶちまけてしまうかわかったもんじゃないかった。

そして中学を卒業し地元の同じ高校に入学した。

そこでも莉乃はモテモテだった。

内心、気が気じゃなかったが莉乃の性格を考えて
まあ大丈夫だろうと高をくくっていた。

だって莉乃って人間に興^{きょう}味^みないのかっていうほどあまり人の
誘^{さそ}いに乗る方じゃなかったから。

表情の変化が捉^{とら}えにくく
ずっと一緒にいた俺でさえ笑った顔なんて数えるほど見たこ
とがなかった。

中学の頃 莉乃に恋^{こい}心^{ごころ}を抱^{いだ}いてる奴を何人も見たが
一^{いち}同^{どう} 断れるだろうと考^こえ告^{こく}るやつなんていなかった。

それがどうだ高校生になると告^{あらわ}るやつが現^{あらわ}れ始めた。

そしてあろうことが俺の予想とはかけ離^{はな}れ
莉乃は告^りられるとすぐ^のに付^{こく}き合い始めてしまった。

その話を聞いた俺は驚^{おどろ}き内心ショックしながらも
気持ちがバレないように隠しながらどうしてか理由を聞いた。

どうせ莉乃からは浮いた話は話さない
自^じ慢^{まん}するタイプでも惚^{のろ}気^けけるタイプでもない。

こうでもしないと気になって眠れなくなるのが目に見える。

俺は地雷^{じらい}を踏み^ふに行く覚悟^{いど}で挑んだ。

そして莉乃^{なな}は斜め上^{へんとう}の返答^{いど}をした。

『だって告白されたから』

「はい？」とつい俺は聞き返してしまった。

そんな気軽^{きがる}なの？莉乃^{りの}ってそんな感じで付き合うのかと

若干^{かいしゃく}、解 釈 違い^いをを起こしそうになった。

そして聞いたあとの記憶は

ショックすぎたのか 朧^{おぼろ} げで覚えていない。

ただ家に帰り俺も告白^{こくはく}するんだったと後悔^{こうかい}したが

同性だから無理かとなどとグルグル考え数日

寝込^{ねこ}んだのを覚えている。

そして現在^{げんざい}に至る……

休んでいる間 莉乃がプリントを持ってくるたび

心がひりついてどうになりそうだった。

出来るだけ合わないように心がけていたが母が 困^{こま} ったことに

俺の様子を見かねて莉乃に相談^{そうだん}してしまった。

そして莉乃はそれを断らずに俺のところにきてしまった。

『どうかしたの？』

「いや…別に……」

言えるわけがない…

莉乃が恋人作ったことに悩んで何日も休んでますなんて…。

『ふ～ん』

「近い近い！なんだよ！！」

うつむいてうやむやにできないかと考えていると

莉乃が顔を覗きこんできた。

『そんな 驚く事じゃないでしょ？…別になにも無いなら良いけど…それより…こんなに学校休んで勉強大丈夫なわけ？』

「え…あ…いやそれは…」

正直 莉乃と違って頭の出来はよろしくないため休むのはま
ずい…………のはわかっているのだけれど…

体が動かなかったのだからしょうがない

ああでもテスト近いんだよなあ。

『勉強…教えようか？』

「へ？」

考え込んでる間に莉乃が嬉しい提案を持ちかけてくれた。

彼女が出来たとはいえ

莉乃がこうして構ってくれるのが嬉しい。

『だから…勉強…教えるって……いらないならいいけど』

「いる！！！」

即答した俺に莉乃の口角が少し上がった。

(あっ今笑った…珍しい…莉乃やっぱ…可愛い…)

『なにしてんの？こっち見てないで

教科書とプリントだしなよ…あと消しゴムとペン』

「えっあ～うん！！わかってるって！」

慌ててすぐに莉乃に言われた物を取り出し

勉強を教えてもらった。

「だあ～～休憩！！」

『まあ…ここまでやればいいんじゃない？』

「^{はん い}範囲ひれ～よ…」

『そう？簡単だし覚えやすいと思うけど』

「あのなあ頭の出来が違うんだよ！！

莉乃には簡単だろうけどなっ俺にはむずいの！」

『それ言ってて^{かな}悲しくなんないの？』

「…………なる…かも…」

『フッそう…』

「ッ（また笑った）」

『なに？』

「いや…えっと…そういや彼女と上手くいってんの？」

しまった…^{わ だい}話題をそらしたくてつい聞いてしまった…

^{のろ け}惚気なんて聞きたくないのに…

やっぱり今からでも違う話をふるか？

嫌でも気になるようなそうじゃないようなあ…………

『別れたよ』

「え？」

どうしようか悩んでると予想外の返答がきた。

「な…なんで？」

『あんまり話さないし構^{かま}ってくれないからもう別れるって』

「りっ莉^り乃^のが振^ふられたのか??」

『そうだね…』

「そ…そっか…」

いや…まあ莉乃の性格^{せいかく} 考えたらまあそうだろうなとは思うが
最初からわかるだろう…こいつはドライだ。

それにしても莉乃には何回も驚^{おど}かされる…そう思いながらも
性格の悪いことに、やったこれで一安心^{ひとあんしん} だなどとホッとして
しまう。(もしかしてこれチャンスなんじゃ……

いやでも…そもそも莉乃^{り の}が男イケるかわかんねえし…)

『どうかした?』

「えっあいや??」

(先にイケるかどうかだけ聞いてみるのもありか)

自分も告るかどうか^{なや}悩みすこし^{さぐ}探りをいれる事にした。

「莉乃ってさ、モテるよな」

この手の^{わ だい}話題は自分から^{ぼ けつ ぼ}墓穴を掘りそうだったから
^さ避けてきたんだがもうそんな事言ってもらえない…
他のやつに取られたくない。

『なにいきなり…別に普通じゃない?』

「あ～いやでも^{けっこう}結構…莉乃の事好きなやつ多いし
^{さいきん}最近よく告られるだろ?」

^{けっいてき}決定的なことは聞くのは怖いからできるだけ^{にご}濁して……

『……………そうだね』

「それでその…^{り の}莉乃ってその…お…」

『なに?』

「いやその…男からもあるのかな～って」

『あるけど…？』

「えっ！まじで！」

(相手…なんてすごいメンタルだ…^{うら}羨ましい)

『それがどうかした？』

「え、いやその…前に告白されたから
付き合ったって言ってただろ？」

『そうだね』

「その…男もそうなのかな～って？」

『まあ、そうだね、いま付き合ってるの男だし』

「へ～そうなのか～って…え！？は！？
別れたばかりだろ？」

『うん…その日に告白された』

「で…付き合ったと？」

『そうだね』

「……………」

あっ頭が痛くなりそうだ。

つ〜かなんだその理由…それじゃあこっちが悩んでたのが

^{ば か}馬鹿みたいじゃねえーか！！

『どうかした？』

「いや……なんでもない……」

どうかしたか？じゃねえ！！

俺の休んでる間に男に取られるなんて！ううう！！

『気分悪い？』

俺の様子に心配した莉乃は顔を近づけてこちらの顔色を ^{うかが}窺 ってくる。

「えっいや…なんでもない大丈夫だから！」

だから近い！！本当に俺の事、意識してないな

こっちばかり意識してなんか馬鹿みたいだ。

『みつる？』

「……………わりい…なんか…ちょっと疲れたかも…」

『…まあ ^{みつる}満 の割に ^{けっこう}結構頭使ったもんね』

「一言余計ひとことよけいなんですか？？」

『……………今日は帰るよ…じゃあね……………』

「あ～ありがとな…」

『……………』

「どうしたんだ？」

帰ろうとした莉乃りのなは何故なぜか立ち止まりこちらに振り向いた。

『明日は学校これそう？』

「あ～…多分…行く」

休んでる場合じゃないしな…また莉乃が振られる可能性も

考慮こうりょに入れて行動すればいい！次は俺が告る！！

なん～て俺 性格悪いよな…

でもどうしようもないくらい好きなんだ…何が何でも好き。

『そう…じゃあ…またね…』

「お～またな～」

莉^り乃^のを玄関^{げんかん}まで見送ると

すぐに部屋に駆け込み^{かこ}ベッドに潜^{もぐ}り込んだ。

「はぁ……………莉^り乃^ののバカ……………」

なんでそんな簡単に付き合うんだよお」

（てか…そいつと莉乃…どこまでいってんだろ…

いやだぁ莉乃が汚されてるとか考えたくねえ！！）

どこまでも妄想^{もうそう}の域^{いき}を出ないそれをもんもんと繰り返^くしては
悩み…気がつけば寝落ちしていた。

次に目が覚めると朝になっていた。

外で鳥がチュンチュンと鳴き始めて

カーテン越^こしから光が差し込んでいる。

「まじか……………」

すぐに制服に着替えて

学校に行く準備をして自室を後にした。

リビングに行くと母がおはようと優しく声をかけてくれ
ご飯を並べていた。

(そういえば…結構…休んだのに…理由とか一回くらい…
どうしたのか聞くだけであとは全然聞かなかったな…)

母のいつも通りの姿を見て見守ってくれてたんだろうなと思
うとじんわり心が温まったのと同時に少し罪悪感ざいあくかんが湧いた。

(ごめん母さん恋煩こいわずらいで休んじゃって……………)
心の中で謝りながら用意してくれた
ご飯を食べて玄関に向かった。

(…莉乃も理由、無理に聞いてこななかったな……………
…心配してか…それとも…聞くまで興味きょうみがなかったか…)

前者ぜんしゃ なら嬉しいけど…やっぱり…後者だろうなとトホホと少
し憂鬱ゆううつな気分で靴くつを履はいいて外に出た。

そして扉を開けるとすぐに『おはよう』と言われた。

「えっ莉乃りの! ?」

『そんなに驚くことじゃないでしょ?』

「いやお前いつも先いくじゃん」

『今日はなんとなく……それより、もういいわけ？』

「え…あ～うん だいぶ元気元気～」

『ふ～ん……』

「なんだよ…」

『別に…早く行くよ』

「えっああ」

スタスタ歩いていく莉乃の後を追いかけて
一緒に学校に向かった。

正直嬉しかった。

莉乃の隣にいられるだけで気分が良くなるのだから^{おど}驚きた。

まあ…それも長く続かなかったけど…

学校へ付くとすぐに^りの莉乃は一人の男子生徒に連れて行かれた
それだけで^{さっ}察しがつく。

彼が莉乃と付き合ってるのだろう

俺を見た^{しゅんかん}瞬間 ^{にら}睨んできたし。

まあ…^{てきい}敵意 向けるのは…分からんでもないけど……………そういや…あいつ見たことないな…誰だっけ。

そんな事を思いかがらクラスメイトに話しかけると
みんなから心配された。

ごめんごめんと^{ひらあやま}平謝りをして席につくと
すぐにホームルームが始まる。

ぼやあと今朝あったことを考えて
友人に彼のことを^{たず}尋ねると教えてくれた。

どうやらひとつ下の後輩らしい。

バスケ部でイケメンで人気らしく
何故か最近 莉乃に^{なつ}懐いてるらしい。

(懐いてんじゃなくて付き合ってたよなあ……)

「はあ……………」

こうなるともう授業なんて頭に入ってこない　ずっと考えこ
み昼飯も食べた気がしなかった。そして掃除の時間になりご
み捨てを頼まれた……………いや…押し付けられた。

取り敢えずゴミ箱を持って回収場所まで捨てに行った。

そして見たくない光景を目に入れてしまった。

ゴミを捨てる最中^{さいちゅう}、近くの木陰^{こかげ}でいちゃついているカップルが目に入った。

やってんなぁと思いながらも通り道なので
気にせず通ろうと側まできてつい二度見してしまった。

相手は今朝^{けさ}の後輩^{けさ}くんと莉乃^りだった。

莉乃^{りの}は気づいてないが

後輩の方は莉乃にキスしながらこちらに視線^{しせん}をやってくる。

その視線は早くどっか行けということなのか
それとも馬鹿にしてるのか取り敢えず嫌な視線だったので
無視して通り過ぎた。

(あ～気分わる……………)

あんなの莉乃たちじゃなくても見たくねえよ
もっと別の場所選べよ。

心なしかバカスカ足に当たる

ゴミ箱の音がデカくなるが仕方ない。

むかつくというか…なんというか…

「はぁ」

…俺が悪いんだよな…勇気なくて告れなかっただけだし…

(あ～やべ涙出てきた)

その場でへたり込みゴミ箱を前にボロボロと泣いた。

そして勝手に流れてくる涙を拭き取っていると肩を叩かれた

(やべっここ ごみ捨て場の前じゃん誰か来るよなそりゃ)

慌てて涙を拭き取り振り返って驚いた…

後ろには莉乃がいたのだ。

「な…なんで…」

(さっきまであいつといたのに…)

『何その顔？…なんかあった？？』

「いや…別に…それより…さっき」

『あぁ…^{みつる}満が馬鹿みたいに音鳴らしながら
ゴミ箱持ってたから気になってきたんだけど』

「えっあぁ……」
そういえばそうか…あんな音鳴らせば気づくよな…。

バカだな俺は…「はぁ」と小さくため息を漏らせば目の前に
足が近付いてきた。

「り…の？」

『泣いてたでしょ？何で？』

^{り の}莉乃はそのまましゃがみこんで俺と同じ目線に合わせると
両手で頬を包み込んでくる。

「いや…別に」
泣いていたことと莉乃の顔を^{ちよくし}直視するのが
恥ずかしく気まずい。

『嘘つき…なんかあったんでしょ？』

「いやまじでゴミが目の中に入っただけだから」

『…………ふ～ん…』

「それよりいいのか？」

『なにが？』

「恋人…置いてきたんだろ？」

『あ…そういえば…そうだったね…』

「…………おまえな…」

そこまで忘れっぽいと彼氏くん^{どうじょう}に同情するぞ…。

『じゃあ ぼくもう行くよ』

「あ～うん…ありがと…」

『…………』

「えっちょっ」

お礼を言うと何故か莉乃は俺の頭を驚^{わしづかみ}掴みにし

らんぼう^{なで}に撫でるとその場を去^さっていった。

(莉乃なりの…優しさってやつ?)

「ううう」

(なんだそれ…めっちゃ好きになるじゃん…くそ…)

そしてチャイムが鳴るギリギリまで
その場所でうなだれていた。

そしてあれから一週間が過ぎた頃

相変わらず、莉乃はあいつと付き合っていた。

そして、良く見かけるようになった
というよりも見せつけられているのが正解か…。

俺が行く先々であの後輩に絡まれて莉乃と
どれだけ仲がいいかを聞かされたり見させられる。

それだけで胸が張り裂けそうになるが必死に抑えた。

あの野郎…性格クソか。

さんざん
散々な一日を終えて一人で下校しようと

げ た ばこ
下駄箱までやってきて つい ため息をこぼした。

「はあ……………」

(このまま毎日あれが続くと思うと気が狂いそうだ…)

靴を履^はき替^かえて下を見ながらぼんやりしていると後ろから声をかけられた。振り返ると見知らぬ女子生徒がいて少し話がしたいから裏庭^{うらにわ}までついてきてと言われた。

いや こんな事 言われたらそりゃ、告白だなんて俺にも春がきたのかと思うじゃん。

まあ違ったら罰ゲームとかそんなのだろうけど…取り敢えず一緒についていった。

どっちみち答えは決まってるし。

そして案^{あん}の定^{じょう} 告られそして断った

好きな人がいるからごめんと素直に言った。

女子生徒は少し泣いていたがそっかと言って去っていった。

自分も恋をしてるのだから、

多かれ少なかれ振られたら悲しい気持ちはわかる。

果^はたして振られても自分は彼女のように去れるだろうか。

そんな事を考えていると

チクリチクリと胸の奥がいたんできた。

もし…このまま一生この感情が続くのだとしたら。

今更 他の子を好きになれる気がしない。

「はぁ……………」

その場に^{くず}崩れ落ちて

またぼーっと考え込んでいると目に涙が浮かんできた。

『……………ねえ…』

「ひえっ」

^{ゆ だん}油断 してるここに話しかけられびっくりして後ろを振りかえ
ると^{り の}莉乃がいた。

（一週間前と同じかよ！

泣いてるところ見られたくないのに…）

『……………また泣いてんの？』

「まぁ…えっと…」

やばさっきの聞かれてたか？

いや別に問題ないけど…なんだかなあ…。

『さっきの子に振られた？』

「えっいや…ちがっ」

なんだ会話まで聞かれないのか。

『ふ～んじゃあ付き合うの？』

「いや…ふった…」

そう言うと莉乃^{りの}は少し目を見開いて驚いていた。

『…………へえ…………好きな人でもいるの??』

「…それは…まあ…うん…」

好きな相手が目の前にいるのにそれを正々堂々言えないのは

少し悲しい…………どこまでも臆病^{おくびょう}に考えてしまい…段々と視線が足元にいってしまう。

怖い…このままこんな感じ莉乃と終わってしまうのかな

いっそのこと勢いに任せ^{まか}て告ってしまおうか

などと考えていると莉乃が食い気味に話しかけてきた。

『…………誰？ぼくの知ってる人？』

「は…？なに言ってっ…？」

莉乃はこの前のようにしゃがんでこちらに目線を合わせると
肩を掴んでこちらを揺らしてくる。

『だから、誰って聞いてんだけど？？』

「いや……別に誰でもいいだろっ揺らすなよっ」

（目の前に居ますなんてそんな事を言えるわけがない）

『なんで？』

「^り^の莉乃には言いたくない…」

『…………意味わかんない……………教えなよ…』

「嫌だって…もう俺帰るから！

莉乃は彼氏くんと帰れよ！」

『…………わかった』

「……じゃあな」

莉乃を振りほどくとすぐにその場をあとにした。

そして全^{ぜん}力^{りよく}疾走^{しっそう}で家まで駆^かけ込んだ。

「はぁ…っはぁっ」

(何だあの顔…見たことない顔…)

そんなに教えなかったのが気に食わなかったのか？)

(なんで？いつもそんな事聞いてこないくせに…)

俺のことなんて微塵^{みじん}も興味ないんだろ)

(駄目だ莉^り乃^ののことばかり考えて
自分の事がおろそかになってしまう)

「風呂はいるか……………」

(ゆっくり…シャワーでも浴びて
取り敢えず落ち着かないと…)

服を取りに自室に戻りそしてシャワーを^あ浴びた。

「はぁ…」

結局 風呂場でも莉乃のことばかり考えてしまったので
素早く体を洗い、すぐに風呂場から出てしまった。

部屋に戻りベッドに腰掛け^{あおむ}仰向けになって天井^{てんじょう}を眺め^{なが}ながら
莉乃の事を考えていると

数分立たないうちにウトウトし始めた。

もう寝る…我慢できない…そう思っていると家のチャイムが
なり驚いて^{はんしゃてき}反射的に飛び起きてしまった。

チャイムは何回も鳴り^{ひび}響き止まることがない。

「母さんいないのか…」

（そういや母さんなんか父さんと旅行^{りょこう}とか言ってたな…
莉乃^{りの}のことで頭いっぱい忘れてた）

寝ぼけている体を起こし

フラフラと玄関へと向かい扉を開けた。

「はい…どちら様ですか……？」

（やべ…インターホン確認するの忘れてた…
面倒なのじゃないといいけど…）

開けてしまってから気づいても

もう遅い、恐る恐る扉を開くと外には制服姿の莉乃がいた。

「は…？なんで？」

『家上がっていい??』

「いや、え?は?」

突然来た思わぬ来客^{らいきやく}に戸惑^{とまど}っていると莉乃は靴を脱いで家
上がろうとしていた。

『おじゃまします』

「ちょっ良いて言っていないっ」

スタスタと我が物顔^{わものがお}でオレの部屋に直^{ちようこう}行^りする莉乃^のを慌^{あわ}てて
止めようとするが止まらない。

気がつけば自室に付いてしまった。

「……………なんだよ…いきなり…………」

『……………別れた』

「は?」

『だから別れた』

「か…彼氏と??」

『そう』

「なっなんで？」

『…………』

「り…の??」

ジトッと俺を見る^{り の}莉乃はだんだんと俺の方に近づいてくる。

「ちょっなんだよ！！」

^{おど}驚いて後ずさるとベッドに足が当たって

^{しりもち}尻餅をついてしまいそのまま^{れ くび}手首を^{つか}掴まれ

ベッドに^お押し^{たお}倒された。

『ねえ…みつる…好きな人ってさ誰??』